

<シナリオ>

短編舞台シナリオ「嘘吐き村の事情聴取」 短編映画シナリオ「なりきり」

大 石 若 菜

1 短編舞台シナリオ「嘘吐き村の事情聴取」

あらすじ

とある田舎の村で陰惨な殺人事件が起こり、都会からやってきた刑事が容疑者達の事情聴取を行うことになった。事情聴取を始める前、刑事は村の警官から、奇妙な話を聞かされる。警官の話によると、「この村は、村人が嘘ばかりを吐く嘘吐き村である」という。警官の話に半信半疑の刑事だが、さっそく容疑者達の事情聴取を始める。容疑者は 4 人。一人目の容疑者は、被害者の屋敷で働いている家政婦。二人目の容疑者は、被害者の屋敷の庭を手入れしていた庭師。三人目の容疑者は、被害者の屋敷で厨房を任されている料理人。四人目の容疑者は、被害者の屋敷で子守りとして働いている若い女性である。はたして、村人達の証言は信用できるのか。犯人は誰なのか。

2 短編映画シナリオ「なりきり」

あらすじ

大学生の浅野幸弘は、複数の女性と交際し、それぞれの女性の好みに合わせて、自分のキャラクターを演じ分けている。ある日、学内で、友人の園原あゆむに、そのことを指摘される。幸弘はあゆむに、「本当の自分を見せられないのは自分に自信がない証拠だ」と言われ、悶々とする。

短編舞台シナリオ「嘘吐き村の事情聴取」

1 警察署 廊下

取り調べ室の前まで、会話しながら歩いてくる警官（25・男）と刑事（29・女）。

警官「今日は遠い所をどうも」

刑事「いえ。あの、失礼ですが、以前、この村を担当してらした方と違う方ですよ」

警官「ええ、人事異動がありまして」

刑事「そうですか」

警官「着いてさっそくですが、容疑者 4 人は、もう集まっているんで、お疲れでなければ」

刑事「分かりました。では、すぐに始めましょう」

警官「はい。助かります」

刑事、持っていたファイルを開きながら。

刑事「それにしても、変わった事件ですね」

警官「この辺を仕切っていた地主ですからね、被害者は。もう大騒ぎですよ」

刑事「容疑者は絞り込めているのに、決定打がない」

警官「はい。でも、俺が思うに、間違いなく、あの中に犯人はいますよ。まあ、俺の意見なんて、あんまり意味がないかもしれませんが」

刑事「とんでもない。でも、なんで、そうハッキリと確信しているんです？」

警官「俺は最近、この村に外から赴任してきた人間だから言えるんですが、この村の人間は信用できません」

刑事「なぜ？」

警官「刑事さんは、この村のあだ名をご存じない？」

刑事「あだ名？」

警官「嘘吐き村というんですよ」

刑事、冗談だと思って笑う。

刑事「それ、クイズの話でしょう。嘘吐き村と正直村の」

警官「だと思うでしょう。ところが、そうではないんです。この村は、本物の嘘吐き村なんですよ」

刑事「じゃあ、なんですか。村人達は全員、嘘しか言わないとでも？」

警官「そのまさかです」

刑事「まさか」

警官「まあ、嘘しか吐かない、というのは言いすぎかもしれませんが、言う事に嘘が多くなる。今に分かりますよ」

警官、取り調べ室のドアノブに手をかける。

警官「刑事さんも気をつけてください。あいつらの言う事は何一つ、信用しちゃいけませんよ。あいつらの言う事は、全て嘘ですから」

警官、取り調べ室のドアを開ける。

刑事だけを中に入れ、警官は廊下に待機。

2 同 取り調べ室

取り調べ室の中には、机を挟んで椅子が2脚。

一人の若い女性——家政婦（22・女）が腰掛けている。

刑事、家政婦の前に座る。

刑事「こんにちは、はじめまして。私の名前は——」

家政婦「名乗っていただかなくてもけっこうです——私、関係ありませんし、すぐに帰りますから」

刑事「そういうわけにもいかないんですよ。そんな顔しないで。こちらが辛い立場なんです」

家政婦「ご当主様が亡くなったのは事故です」

刑事「事故……ね。事故で舌が引っこ抜かれたりしますかね」

家政婦「私は無関係です」

刑事「それを調べなければならないんですよ。いいですか。不本意なもの、早く帰りたい気持ちも分かりますが、そのためには、あなたのご協力が必要です。ご当主が亡くなられた日、あなたが何をしていたのかを教えてくださいませんか」

家政婦、仕方なく頷く。

家政婦「あの日は、雨が降っていました。私は、その日は、一日、屋敷から出ないで仕事をしていました。ご存知かもしれませんが、当家は古くから養蚕を行っております。うちのお蚕から取れた絹糸は、村の名産品です。村は、これで成り立っているようなものです。当家が所有している山には桑畑がたくさん。村の人間も、ご当主様から桑畑を任されて生活しているようなもので……私の実家もそうなのですが。私は家政婦で、家の中のやりくりが仕事ですが、繁忙期には、養蚕の方を手伝うこともある。手伝うと言っても、せいぜい、蚕棚の掃除とか、蚕に餌をやるくらいですが。あの日も、私は家事が一段落着いたら、蚕小屋の掃除をするよう、言いつけられていました。だから、あの日、私は家から一步も外に出ていません。それは庭師の者に聞いてもらえれば分かります」

刑事「なるほど。あなたのご実家は古くからご当主の家に依存する形で暮らしを立ててきた、という事ですね」

家政婦「その言い方、失礼じゃありませんか？」

刑事「失礼。お気に障りましたか」

家政婦「不愉快です」

家政婦、怒って席を立つ。

刑事「失言だったようです。でも、まだ帰られちゃ困ります。隣の部屋で待っていてもらえますか。

あ、あと、最後にもう一つだけ。この村の別名をご存知ですか？」

家政婦「別名？ 知りませんよ、そんなの」

家政婦、刑事を睨みつけて部屋の外に出る。

部屋の外で、警官に連れられ、隣の部屋へ移動。

家政婦、別室で椅子に座らされる。

刑事「（独り言）失礼な物言いには、普通に憤るし、特に情緒に問題があるようには見えないけどなあ」

警官、別の部屋から庭師（23・男）を連れて、取り調べ室をノック。

刑事「どうぞ」

取り調べ室の扉が開き、庭師が中に入ってくる。

刑事「どうぞ、掛けてください」

庭師「はあ……どうも」

庭師、キョロキョロして、落ち着かない様子で椅子に座る。

刑事「初めまして。私は――」

庭師「（遮るようにして）よそから来た刑事さんなんですよ。お名前は外のおまわりさんから聞きました」

刑事「そうですか」

庭師「あの、言ってもいいですか？」

刑事「というと？」

庭師「（声を低め、ひっそりと）俺、犯人知ってるんです」

刑事「犯人を知っている？」

庭師、神妙に頷く。

庭師「犯人は、あの家政婦の女ですよ」

刑事「なぜ、そう思うんです？ 順を追って話してもらえますか」

庭師「もちろん。あの日、俺は屋敷の庭にある松を手入れしていたんです。ですが、雨がざーざー降ってきやがったんで、こりゃ仕事にならない。仕方がなく、雨宿りをかねて、軒先で休憩していたんです。したらですね、俺は見たんですよ。あの女が、コソコソと勝手口から外に出て、庭の裏木戸から屋敷の外に出て行くところをね。頭からすっぽりショールをかぶっていたけれど、あの背格好は間違いありません。俺は寝転んでいたから、あいつからは見えなかったんだな。あんな雨の日、傘もささずに出て行くから、おかしいなとは思ってたんですけどね。これは、間違いなく秘密の男と逢い引きだな、と思っていたら、まさか、そのお相手がお当主だったとはね」

刑事「でも、女性が男を殺すのは、難しいのでは？」

庭師「そんなもん、方法はいくらでもありますよ」

刑事「具体的には？」

庭師「俺が知るわけがない」

刑事「どうして、そんなに、あの家政婦さんを目の敵にするんですかねえ。あなた、彼女と何かあったんですか？」

庭師「何かって、なんもありやしませんよ」

刑事「本当に？」

庭師「あんた、喧嘩売ってんのか？」

庭師、怒って立ち上がる。

刑事「失礼。お気に障りましたか」

庭師「（舌打ち）なんだよ、せっかく協力してやってんのに。俺はもう帰るぜ」

刑事「まだ帰られちゃ困りますよ。別室で待っててください」

庭師「知るか」

刑事「今帰ったら疑われるかもしれませんが。あ、あと、最後にもう一つだけ。この村の別名をご存知ですか？」

庭師「別名？ んなもん、ねえよ。隣村の話じゃねえの」

刑事「隣村？」

庭師、刑事を睨みつけ、ズカズカと部屋から出て行く。

部屋の外で待っていた警官に連れられ、別室に連れて行かれる庭師。

刑事「（独り言）煽れば素直に嘸み付いてくる。バカ正直というか、なんというか。とても嘘をついているようには見えないけれど」

警官、料理人（30・男）を連れて取り調べ室をノックする。

刑事「どうぞ」

警官、料理人を取り調べ室の中に入れる。

刑事「どうぞ、お掛けください」

料理人「（落ち着いた様子で）はい」

刑事「初めまして。私は――」

料理人「申し訳ないが、名乗らないでください。名前を知ったら忘れられなくなるので。取り調べを受けたなんて記憶、一刻も早く消し去りたいんです」

刑事「分かりました。では、さっそく始めましょう。では、まず――」

料理人「俺はね、刑事さん。魚をさばくのが得意なんです」

刑事「は？ 魚ですか」

料理人「そう。魚。変でしょう、山奥の村の料理人なのに、得意料理が魚なんて」

刑事「いえ、そんなことは」

料理人「昔からそうなんです。山奥だから、魚といったら、もっぱら川魚が主だけど、焼き魚も煮付けも、俺にかなう奴なんかいやしません。ご当主はそんな俺の腕を買ってくれた恩人です」

刑事「慕っていらしたんですね」

料理人、頷く。

料理人「許せないですよ。ご当主を、あんなゴミみたいに殺した奴のことが」

刑事「もちろんですとも。警察も全力をあげて捜査しています」

料理人「刑事さん。刑事さんは、俺の前に、庭師の奴と話をしたのでしょうか。アイツ、妙な事を言っていないませんでしたか」

刑事「妙な事、というと」

料理人「例えば、家政婦が犯人だとか」

刑事「詳しく聞かせてください」

料理人「庭師のアイツ、以前、家政婦と付き合っていたんです。でも、家政婦に、他に男が出来たんで、ふられたらしくて。それ以来、アイツ、執念深く家政婦を恨んでいるんですよ。アイツ、思い込みが激しくて、こうに違いないって思うと、本気でそう思い込むから、あまり真に受けられない方がよい」

刑事「なるほど。あなたは、庭師の方をあまり良く思っただけじゃないんですね」

料理人「あんなネチネチした奴、誰だって好ましくは思わないでしょう」

刑事「理由はそれだけでしょうか」

料理人「どういう意味です？」

刑事「（含みのある感じで）家政婦さんの新しい恋人は、いったい、どなたなのでしょうね」

料理人「あんた……俺がそうだって言いたいのか」

料理人、立ち上がって刑事の胸ぐらをつかむ。

刑事「失礼。お気に障りましたか」

料理人、舌打ちをして、刑事の胸ぐらを乱暴に放す。

取り調べ室を出て行こうとする料理人を呼び止める。

刑事「まだ帰られては困ります。別室でお待ちください。あ、あと、最後にもう一つだけ。この村の別名をご存知ですか？」

料理人「嘘吐き村だろ。それ、ここじゃなくて、隣村の話だ」

刑事「隣村？」

料理人「ああ。なんでも、村人達が全員、新種のおかしな薬をやっていて、嘘しかつけない体になったとか、何とか。でも、実際にはそんな村存在しない。たんなる噂だよ。もう、いいだろ」

刑事「ええ、けっこうです」

料理人、刑事を睨みつけ、部屋から出て行く。

部屋の外で待っていた警官に連れられ、別室に連れて行かれる料理人。

刑事「（独り言）実直そうな人だわ。本当に、彼らの中に犯人がいるのだろうか」

警官、子守り（20・女）を連れて取り調べ室をノックする。

刑事「どうぞ」

警官、子守りを取り調べ室の中に入れる。

刑事「どうぞ、お掛けください」

怯えた様子でおずおずと椅子に座る子守り。

刑事「初めまして、私は――」

言い終わらないうちに、机に突っ伏して泣き出す子守り。

刑事、驚いて腰を浮かす。

刑事「どうしました」

子守り「私、私……」

刑事「落ち着いてください。話を聞くだけですから」

子守り「私、怖いんです。きっと殺されちゃうわ」

刑事「どういう意味です」

子守り「私、あの料理人に殺されちゃう」

刑事「料理人？」

子守り「私、知ってるの。アイツは異常よ。ご当主を殺したのも、きっとアイツに違いないわ」

刑事「なぜ、そう思うんです。ほら、涙を拭いて。ちゃんと話してください」

刑事、子守りにハンカチを渡す。

子守り、ハンカチで顔を拭き、話し始める。

子守り「私、見たんです。あの男の異常な趣味を。以前、山に猪が出たことがあって、畑が荒らされるという被害にあったことがありました。罾を仕掛けても捕まらないし、村の皆は困り果てていたんです。でも、ある日、その猪が突然、現れないようになりました。皆は素直に喜んだけれど、私は喜べなかった。だって、その猪がなぜ来なくなったのか、知っているのだから！」

刑事「何を知っているんです」

子守り「あの猪は、料理人に殺されたんです。それもただの殺され方じゃない。執拗に何度も何度も鉋を振り下ろされて……アイツ、笑いながら殺していたんです！」

刑事「あなたは、その現場を見てしまったんですね」

子守り、頷く。

子守り「山に山菜を採りに行っていたんです。そこで、偶然。あれ以来、あの男が魚をさばいているだけでも、ゾッとしてしまって」

刑事「その事は、誰かに言いましたか」

子守り、激しく首を振る。

子守り「言えるわけないじゃありませんか！ 私が喋ったってバレたら、何されるか分からないもの」

刑事「そうですか」

子守り「ご当主が亡くなられた日も、アイツ、魚をさばいていたんです。私は料理人に言いつけられて、厨房を手伝っていたのですが、本当は嫌でした。アイツが魚をさばいている包丁の音を聞いているだけで気がおかしくなりそうで。だから、私、途中で逃げ出してしまったんです。頭にショールを巻いて、人に見つからないように、庭の裏木戸から。本当はコソコソする必要なんかないのだけれど、なんだかひどく怖くて」

刑事「本当に怖かったのでしょうか？」

子守り「どういう意味です？」

刑事「本当は、何か理由があって、屋敷をこっそり抜け出したのではありませんか？」

子守り「……私をご当主を殺したとでも言いたいんですか！」

子守り、机を叩く。

刑事「失礼。お気に障りましたか」

子守り「帰ります！ ひどすぎる」

刑事「まだ帰ってもらっては困りますよ。別室でお待ちください。あ、あと、最後にもう一つだけ。

この村の別名をご存知ですか？」

子守り「嘘吐き村でしょう。言っておきますけど、うちの村は、皆、正直者ばかりですから。都会の人って嫌ね。人里離れた田舎に、日本の法律が通用しない閉鎖された村があるとか、その村の村人は皆薬漬けになっていて、手に注射針の痕が無数にあるとか、そういう噂話ばかり。田舎をなんだと思ってるのよ」

子守り、泣きながら、部屋を出て行く。

部屋の外にいた警官に連れられ、別室へ。

戻って来た警官、取調室へ入る。

警官「お疲れ様です」

刑事「どうも」

警官「どうでしたか」

刑事「正直なところ、よく分かりませんね。皆、嘘を言っているように見えない分、よけいに、全員、嘘を吐いているような気がしてくる」

警官「まあ、実際、そうなのでしょう」

刑事「どういう意味です？」

警官「刑事さん、世の中で最もたちの悪い嘘吐きはなんだと思いますか」

刑事「なんですか？ ナゾナゾか何かですか」

警官「真面目な話ですよ」

刑事「——まあ、嘘も方便と言いますからね。とりあえず、相手の事を思いやっつの嘘なら、まあ、たちの良い嘘と言えるんじゃないかな」

警官「刑事さん。俺はね、世の中で最もたちの悪い嘘吐きは、嘘を吐いている自覚のない奴だと思ってるんです」

刑事「言っている意味が、よく分からないですね。自覚もなしに嘘を吐くなんてこと、ありえるんですか」

警官「刑事さんは、さっきの連中を取り調べしていて、どう感じました？」

刑事「どうって」

警官「あいつら、確かに、嘘は吐いていなかったかもしれない。ですが、嘘をつかなくても、人を騙す事も陥れる事もできますよね。証言の裏に、連中の悪意がありませんでしたか。自分から捜査の目を外すために、思い込みで他人に不利な証言をしていませんか。もっともらしい言葉の裏に、汚らしい本音を隠してはいませんか。あいつらは、確かに嘘は吐いていないかもしれませんが、刑事さん、あなたはあいつらを信用できますか」

刑事「あの……その手」

刑事、警官の手に無数の注射針の痕を見つける。

警官、めくっていた袖をおろす。

刑事「あの……前の担当の方は、人事異動だったんですよね？」

警官「ええ」

刑事「あの4人の中に、犯人がいるんですよね？」

警官「ええ」

刑事「あなたは、犯人を知らないんですよね？」

警官「ええ」

しばらくの沈黙。

警官「あ、雨が降ってきましたね」

刑事、窓の外を見る。

刑事「晴れていますよ」

警官「刑事さん、そんな怖い顔しないで。犯人も証拠も、すぐに見つかりますよ」

刑事「それも、嘘ですか」

警官「いやあ、本当によく降るなあ」

部屋から出て行く警官。

取り残される刑事。

了

短編映画シナリオ「なりきり」

1 大学 廊下

携帯電話で会話をしている浅野幸弘（20・男）。

幸弘「（優しい声で）うん、うん。ありがと。そう言ってくれるのは、君だけだよ。大好き。うん、うん、それじゃまた」

廊下の向こうから幸弘の友人、園原あゆむ（20・男）が歩いてくる。幸弘が電話をしている所を見て、曲がり角の手前で立ち止まり、幸弘の電話を立ち聞きするあゆむ。

幸弘、電話を切り、別の番号にダイヤルする。

幸弘「あ、もしもし、なんで昨日電話に出なかった？ バイト？ やめろつつたろ、バイトなんか。変な客とか来たらどうすんだよ——いいよ、んなもん。俺が払うよ。だからバイトなんかもう行くな。帰りとか遅くなるだろ。じゃあ、戸締まり気をつけて。また電話するよ」

幸弘、電話を切り、再び別の番号にダイヤルする。

幸弘「もしもし、俺——今夜会えない？ なんか、すごく顔が見たい。何も手につかないんだ——悪い。考えておいて」

幸弘、ようやく携帯電話を閉じる。あゆむ、曲がり角の向こうから出てくる。あゆむ、後ろからコソコソ近づいて、幸弘の携帯電話を取り上げる。

幸弘「わ、ビックリした。聞いてたの？」

あゆむ「お前もよくやるね」

幸弘「返せよ」

幸弘、あゆむから携帯電話を取り上げようとするが、かわされる。

あゆむ「こんなもん、いっそ無い方がいいんじゃない？ お前の場合」

幸弘「は？」

あゆむ「手間がかかれば、そんなに大勢相手にしてる余裕なくなるでしょ」

幸弘「ほっとけよ」

幸弘の携帯電話が、あゆむの手の中で鳴る。着メロを聞いて、幸弘の顔色が変わる。

あゆむ「また女か」

幸弘「返せって」

幸弘、あゆむの手からもぎ取るようにして、携帯電話を奪う。幸弘、電話をとる。

幸弘「あ、もしもし。うん、うん——ああ、三者面談？ その日か。ああ、俺は大丈夫だよ。分かった、父さんにも言っというて。じゃあ」

幸弘、携帯電話を閉じる。

あゆむ「家族か」

幸弘「妹」

あゆむ「へえ、いくつ？」

幸弘「中学生」

あゆむ「仲いいんだ」

幸弘「（そっけなく）別に」

あゆむ「そうか？ だって、三者面談のお知らせなんて、普通、兄貴になんか連絡してこないぜ？」

幸弘「親父が忙しいからさ。行けるか分からないんだ。だから、とりあえず、俺に連絡してくるだけだよ」

あゆむ「おふくろさんは？」

幸弘「おふくろは火星に行ってる」

あゆむ「はあ？」

幸弘「いいだろ、別に。そんなことはどうでも」

あゆむ「——ふうん」

幸弘「あーあ。美雪とのデートはキャンセルかあ」

幸弘、携帯電話でメールを打つ。

あゆむ「わっかんねえよな、お前って」

幸弘「何が？」

あゆむ「浮気性さえなければ、悪い奴じゃないのに」

幸弘「交友関係広いですから」

あゆむ「おまけに多重人格ときた」

幸弘「なんだよ、多重人格って」

あゆむ「だって、お前って、話す相手によって、めちゃくちゃキャラ変わるじゃん。声だけ聴くと別人だよ」

幸弘「そうか？」

あゆむ「そうだよ」

幸弘「そうでもないよ」

あゆむ「まあ、男友達に対しては、そうでもないけどさ。なんで、女に対してだけは、そうなのっや

うわけ？」

幸弘「別に、俺がそうしてるわけじゃないよ。相手が俺にそうさせてるんだ」

あゆむ「なんじゃ、そりゃ」

幸弘「彼女達が俺に、それを求めてくるんだよ。だから、俺は彼女達の要求に合わせてキャラを変えてるだけ。一種の奉仕活動だな。俺ばかりが悪いみたいに言うなよ」

あゆむ「一人に絞ればいいじゃん」

幸弘「愛が溢れてるんですよ」

あゆむ「今、何人と付き合ってるの？」

幸弘「彼女は3人」

あゆむ「（冷めた調子で）へえ」

幸弘「なんだよ。なんか言いたいことでもある？」

あゆむ「別に」

幸弘「なんだよ、気持ち悪いな」

あゆむ「いつか痛い目みるぞ、お前」

幸弘「怒ってんの？」

あゆむ「呆れてる。お前のそういうところ、本当、理解できないわ」

幸弘「あゆむ君は頭固いね」

あゆむ「不誠実だっつってんの。相手の気持ちも考えろよ」

幸弘「考えてるよ。だから、皆が幸せになれる方法を考えてるんじゃない」

あゆむ「浮気することがか？」

幸弘「大事にしてるよ」

あゆむ「浮気しながらか？」

幸弘「浮気浮気言うなよ。なんだよ、やけに強調するな」

あゆむ「別に」

あゆむ、歩き出す。その後から付いて行く幸弘。

幸弘「怒るなよ」

あゆむ「怒ってね一つて」

幸弘「怒ってんじゃない」

あゆむ「お前に、浮気される側の気持ちなんか、分かんねーんだよ」

幸弘「分かんないってなんだよ！」

いきなり激昂した幸弘に驚くあゆむ。

あゆむ「——なんだよ、いきなり」

幸弘「だって」

あゆむ「わっかんねーな、お前って」

携帯の着信音が鳴る。

あゆむ「また、女か」

幸弘「俺じゃねーよ」

あゆむ「あ、俺か。（携帯をとって）もしもし。ああ、おふくろ？ （声を小さくして、幸弘から離れる）うん。今日は、病院でしょ。ダメだよ、ちゃんと行かないと。薬もちゃんと飲んで。もう切るから。じゃあ」

電話を切って溜息をつくあゆむ。後ろから、あゆむの様子をうかがう幸弘。あゆむ、何でもない様子で、振り返る。

あゆむ「そろそろ行こうぜ。前の授業、休講になってたから、教室は入れるだろ」

幸弘「ああ、うん」

廊下を歩いていく幸弘とあゆむ。

2 同・教室

教室に入っていく幸弘とあゆむ。

あゆむ「一番乗りだな。一番後ろの席行こうぜ」

幸弘「ああ」

幸弘、あゆむ、窓際の一番後ろの席に座る。席に着いた途端、また携帯の着信が鳴る。発信元を見て、うんざりした顔をする幸弘。電話には出ず、そのまま閉じる。

あゆむ「いいの？」

幸弘「美雪だ。きっと出ても怒り狂ってるよ。アイツ、真面目だから、ドタキャンとかマジで許せないんだ」

あゆむ「大変だねえ」

幸弘「ほんとにねえ」

あゆむ「お前じゃなくて、美雪ちゃんがだよ。不真面目な彼氏を持つと、苦勞が絶えないだろうに」

幸弘「普段サービスしてるんだから、たまのドタキャンくらい大目に見てくれないと」

あゆむ「正直に言えばいいのに。妹の三者面談で行けませんって。理由を言えば許してくれるだろ」

幸弘「いや、いいよ」

あゆむ「なんで」

幸弘「なんか、哀れを誘ってるみたいで嫌じゃん」

あゆむ「はあ？ お前って、ほんと、よく分かんねーわ」

また、鳴り始める幸弘の携帯電話。

あゆむ「怒ってるぞ。早く出ろって」

幸弘、携帯の電源を切る。

あゆむ「あーあ。美雪ちゃん、かわいそ」

幸弘「こんな時、自分がもう一人くらい、いればいいと思うよ。そしたら、怒られ役を押し付けることができるのに」

あゆむ「お前の場合、分身一人じゃ足りないだろ」

幸弘「まあな」

あゆむ「ちなみに、美雪ちゃんがカスタマイズした幸弘君は、どんな彼氏なんだ？」

幸弘「美雪は真面目なお嬢だけど、乱暴で俺様なタイプの男が好きなんだ。そういう男に振り回されて、お説教して、呆れながら世話を焼くのが好きなんだよ。それで、たまに、優しくしてやったり、力任せに守られたり求められたり嫉妬されたりするのがたまらないらしいんだ」

あゆむ「そういうのが好きな女っているよな。でも、見事に普段のお前とはキャラが違うね。疲れない？」

幸弘「すごく疲れる。でも、仕方ないだろ。それが彼女の好みなんだから」

あゆむ「他は？」

幸弘「優子は尽くされたがりだな。とにかく、優しく尽くされることが快感らしい。これまでの人生で周りに優しい男がいなかったのか、その手の男に飢えている節がある。家事や料理が得意で、記念日にマメな男が好きなんだ」

あゆむ「めんどくさいなあ」

幸弘「すごくめんどくさい。優子と付き合ってから、俺のスケジュール帳は真っ黒だよ。意味不明な記念日まで無尽蔵に作るから、覚えるのだけでも一苦労だ。でも、仕方ないだろ。それが彼女の好みなんだから」

あゆむ「他は？」

幸弘「奈々子は、病んでいるタイプの男が好きなんだな。というか、陰のある男に、グラッとくるらしい。過去にトラウマがあったり、精神的に病んでいたり、そういうのをチラつかせると、ものすごい根掘り葉掘り聞いてくる。目をキラキラさせて、神父みたいに説教してくるんだ。自己陶酔型なんだな。この人は、私がいないとダメなんだって思わせてくれるようなタイプが好きなんだよ」

あゆむ「トラウマ好きな子っているよな、たしかに。で、お前はどんなトラウマを持っている設定になっているの？」

幸弘「設定じゃないけど、俺んち、両親が離婚してんの。どこから聞きつけたのか、それが気に入ったらしい」

あゆむ「ああ——なるほど」

幸弘「別にトラウマってほどじゃないけどさ。だって、よくある話だろ。親の離婚なんて」

あゆむ「——そうだな。よくある話だ」

幸弘「（笑いながら）俺、お前のそういうとこ、良いと思うわ」

あゆむ「そういうとこって？」

幸弘「変に気を遣ったり、同情したりしないじゃん」

あゆむ「だって、よくある話じゃん。実際。俺んちもそうだし」

幸弘「あ——そう」

あゆむ「ガキの頃にな。だから、俺んち、母子家庭なんだ」

幸弘「そっか——そっか」

あゆむ「離婚の理由聞きたい？」

幸弘「——いや、いいよ」

あゆむ「なんで？」

幸弘「俺んちのことも詳しく言う気ないから。聞いただけなのはズルい」

あゆむ「（笑って、すぐに真顔になる）お前、今、付き合っている子の中に、本命はいないの？」

幸弘「全員、本命だよ」

あゆむ「良くないぞ、そういうの。今に泣くぞ」

幸弘「俺は博愛主義者なんだよ。それに、向こうから告ってきたんだぜ？ 俺が全員平等に大事にすれば、皆、幸せになれるだろ」

あゆむ「キャラを演じ分けてか？」

幸弘「悪い？」

あゆむ「なんだかなあ」

幸弘「なんだよ」

あゆむ「それって、ただ単に自分に自信がないだけなんじゃないの？」

幸弘「え？」

あゆむ「結局、離れていかれるのが怖いだけなんじゃないの。だから、全部繋ぎ止めておきたいんだ。

でも、お前の今やっていることは、むしろ逆効果だと思うよ、俺は」

あゆむ、幸弘の携帯電話を開き、幸弘に突きつける。

あゆむ「かけろよ、美雪ちゃんに」

幸弘「なんだよ、いきなり」

あゆむ「一人に絞れないなら、全員別れるべきだ、とは言わないけどさ。俺、そこまで偉くないし。

でも、せめて、ドタキャンの理由くらい、本当のことを言ってやれよ。自分が信じて付き合っていた人間が、実は偽物だったなんて知ったら、どんな気持ちになると思う？——俺だったら、精神病人で病院通いになってもおかしくないと思う」

あゆむ、立ち上る。

幸弘「おい、どこ行くんだよ」

幸弘、思わず、あゆむの服をつかむ。

あゆむ「便所」

幸弘「ああ、うん」

幸弘、あゆむの服を離す。あゆむ、教室を出ていく。人のいない大教室に、一人取り残される幸弘。周囲を見回す。

了

あとがき

短編舞台シナリオ「嘔吐き村の事情聴取」は、前島良行准教授よりご依頼があり、2012 年後期メディア学部で行われた身体表現プロジェクトの授業にて、アクティングクラスの学生が演じるための、舞台演劇用短編脚本を制作した際の作品である。私が制作した作品は全部で 3 作品である。今回の作品は、そのうちの 1 作である。制作の際には、以下の条件が提示された。

- ・ 練習のため、セリフ量を多くすること（全員、ほぼ同量のセリフ量が望ましい）
- ・ 1 シチュエーションでの芝居
- ・ 長さは 20 分程度
- ・ 登場人物は 6 人（男 3 人女 3 人）

短編映画シナリオ「なりきり」は、伊藤正治先生よりご依頼があり、2012 年後期メディア学部で行われた制作演習の授業にて、アクティングクラスの学生が演じるための、映画用短編脚本を制作した際の作品である。制作の際には、以下の条件が提示された。

- ・ 役者の役作りの練習のためなので、キャラクターが立っており、台詞が多い脚本にする事
- ・ 台詞から、キャラクターの人物背景がうかがえるような脚本にする事
- ・ キャラクターの人物背景を描くのに、小道具を用いないこと（あくまで台詞で表すこと）
- ・ 伊藤先生の提示した病名（架空の病気、および、病的な状態も含む）の中から、題材を選ぶ事

役者を志す学生達にとって、良い刺激になることを祈る。

A short stage scenario
'Listening to the suspects in a village of liars'

A short movie scenario
'An act of pretending'

Wakana Oishi

1 A short stage scenario 'Listening to the suspects in a village of liars'

Abstract

A horrible murder case occurred in a country village, and a detective in the city came the village to listen to the relating suspects. However, the detective heard a strange story from a policeman in the village. According to the policeman, 'This village is called 'a village of liars', because the villagers always tell lies to people'. The detective could not quite believe the policeman's story, and started to listen to the suspects. The suspects are the four people working in a victim's residence. First, a home help. Second, a gardener. Third, a cook, and fourth, a young woman working as a baby sitter. Can the villagers' testimonies really be trust worth, and who is a murderer.

2 A short movie scenario 'An act of pretending'

Abstract

Yukihiro Asano is an university student going out with more than one girl. Moreover, he pretends to have the personalities liked by the girls. One day, such Yukihiro's behaviour was pointed out by his friend Ayumu Sonohara. Ayumu's words made Yukihiro to worry himself, 'You can not afford to reveal your true personality to the girls, which is an evidence for your lack of confidence'.